

- (15) 古典的な軍歌「兵卒訓戒」に曰く「抑も我等が中隊は、恰も一家の如くなり、一家親密ならざれば、家勢振はぬものぞかし」云々。
- (16) 或るバクトの親分は、彼等の世界の親分制度を説明して後にいう。「こういうことは、どこにもあることで、日本中みんな親分制度というわけですね。そうするとバクチ打だけが代表的な親分制度だといつて、いじめられるのはムリですね」云々。(世界評論、三の二一、三七頁)
- (17) *Seckt* もいる如く「既に今日ではいかなる国の軍隊も純粹な国民的性格を帯びたもののみである」以上「一国民の具有するすべての性質がそのまま軍の性質に反映する」のは、むしろ当然である。(Fedanken eines Soldaten, 1928, 篠田英雄氏訳本一二二頁) など *Encyclopaedia of the Social Sciences* ed. by E. R. A. Seligman の Army の項の執筆者 E. Cloby もこれを説く (Vol. II P.210) 更に、日本のその具体的な様相については飯塚浩二氏「日本の軍隊」(一九五〇年)の到る所に詳細な分析が見事に果されている。
- (18) 『商人や百姓になつたら一生浮ばれんぜ、軍人になることつちや。軍人になつてみんなに崇められるようにならんきや人間じゃないわ』「祖母はよく私にそういつた。私は軍人になることにきめた」云々。(或る農村出の予科練生の手記、「生きのこつた青年達の記録」一四七頁) など、この軍隊生活の道を求めた過剰農村青年の存在を除外しては過去の日本の歴史は説明出来ず、しかもその問題は現代にもなお残っていることは、最近の一新聞が論じた如くである。(昭和二十七年一月三〇日付朝日新聞社説参照)
- (19) 丸山真男氏「日本ファシズムの思想と運動」(東洋文化講座第二卷一五二頁以下) 参照。

- (20) 二・二六事件の理論的指導者北一輝もこの点に注目し、その著「日本改造法案大綱」に於て、天皇につぐ革命主体として在郷軍人会をあげている。
- (21) 東大協組出版部「はるかなる山河に」二二三頁以下参照。
- (22) *Escape from Freedom* 1941 の著者 E. Fromm は所謂「權威主義的性格の本質はサディズム的衝動とマゾヒズム的衝動との同時的存在として述べて」いるが(日高六郎氏訳本二四三頁)我々はこの典型的なものを日本の軍隊に於て数多く発見し得ると思う。
- (23) ライエル前掲書三二〇頁

教師の教育的価値観をめぐり一考察

小野 佐千夫

一、研究のねらい

はげしい転換期に対処して、わが国教育の基本線を日本国民の自主性に基づいて確立し、その方向を明示することの必要性を強く感ずるときにあたり、教育実践の現場にあつて常に子供たちと接している教師は、子供をどのような人間に形成しようとしているだろうか。また、教師は日本の現実社会に対してどのような不

満をもち、何を心配しているだろうか。さらに、教師が子供を通してえがき出そうとしている明日の教育理想像と、現実社会に対していただいている悩みとの間に、どの程度の関連がみられるだろうか。

わたくしがこの研究をはじめようとしたのは、右に掲げた三つの設問に答えるために外ならない。

二 研究方法

以上にのべた視点から教師を把握する手段として、簡単な調査を試みた。

① 調査問題

調査問題は二つからなり、一つは教師の教育理想像についてのもので、もう一つは教師の現実の社会観の一面に関するものである。

〔一〕の問題は、アメリカのミシガン州立大学のフィーザー (B. Feather) 氏が、人物類型の差違を説明する研究(註)で用いた問題を参考にしてつくつたものである。フィーザー氏は、アメリカにおいてしばしば用いられている十個の「価値範疇」(Value Orientation)、『即ち宗教的 (Religious)、『科学的 (Scientific)、『神祕的 (Mystical)、『審美的 (Aesthetic)、『人道主義的 (Humanitarian)、『経済的 (Economic)、『政治的 (Political)、『軍国主義的 (Militaristic)、『煽情的 (Sensate)、『及び社会的「『身分・地位の意味における」 (Status) の十個を配列して問題を作つた。わたくしもこれにならつて第一表の如き質問項目を作成し、教師の教育的価値に対する

態度を検討してみた。

註 An Easy method to Illustrate Differences in Personality

Types Don B. Feather

[January, 1951; Journal of Educational Research]

調 査 問 題

〔第一表〕

〔一〕 あなたはあなたの受けもつていらつしやるクラス、またはあなたの学校に学んでいる子供たちを将来どんな人間につくりあげるために教育していraftしやいますか。

次にかかげた十個の性格は、人間の心の中にやどつているいちじるしい特性をあらわしています。これら十個の性格の中で子供たちが望ましい人間として備えていなければならないとお考えになる大切な性格四つをえらびその大切だと思われる順序に番号をつけて下さい。

- | | | |
|------------|-----|--|
| Religious | () | 神や仏を崇拜し、神仏の意志に従うことのうちに人間生活の幸福を感じる。 |
| Mystical | () | 神祕的な瞑想にふけり、宇宙と現実との一致を信ずる。 |
| Scientific | () | ものごとを科学的に研究し、自然界においては何よりもまず「真理」を求めようとする。 |
| Aesthetic | () | 「美」を正しく評価し、新しい「美」を創造する。 |
| Economic | () | 物質的な富を蓄積し「金をもうける」ことに努力する。 |
| Political | () | 「権力」と「支配」を希望し、力のあるものが人民と法律を統治すべきだと考えている。 |

〔二〕の問題では、日本の現実社会の中で教師がもつとも不満に思
い、且つ心配している事柄は何かを一つだけ尋ねてみた。ここで
は、予め回答のワクをきめずに自由回答法の形式をとつて、被調

Humanitarian () 「人々の幸福」を増進させるためには、自分自
身を無私無欲にする。
Militaristic () 仮想敵にそなえて常に軍備を増強し、戦争が
はじまれば必ず敵に勝とうとする。
Sensate () 一時的な自己表現と、自己欲望の満足を味わ
おうとする。
Status 社会的に高い地位をえて立身出世する。
〔二〕 日本の現実社会の中で、あなたがもつとも不満に思い、又
心配していらつしやることがらを一つだけ簡単にかいて下さ
い。

査者の自由な意見を率直に求め、その内容に即して整理分類して
「意見のワク」を決めた。

② 調査対象

調査対象の中心を大阪府下における義務教育担当の教師(註)に
おき、大阪学芸大学、大阪府教育委員会が夫々主催した昭和二十
六年夏期認定講習に出席した教師の中、教職教養、専門教養、及
び一般教養の受講者二五〇人に調査用紙を配布し、二一枚を回
収した。しかし一枚は、資料として不備であつたためこれを除
外した。従つて実際に資料として今回の研究に使つたのは、男子
一〇三枚、女子九七枚の計二〇〇枚である。

(註) 大阪府教育委員会調査課。昭和二十六年四月三十日調べ。

教師数 小学校 男 二四万五五九八人 女 二三万九八一〇人
中学校 男 九万五二三七人 女 八万二九五一人
調査した人数は極めて少く、対象にした教師も便宜上選んだに
すぎないので、一般的な結論を示すことは困難であり、ある程度
の傾向を知りうるにすぎない。このたびの調査で資料としての役
割をはたした教師の性別、数え年、人数、在職学校別、学校所在
地別、経験年数及び職別を示したのが第二表である。

年令では数え年二〇歳から六一歳に及んでいるが、その中を七
つにわけて考えてみた。まず、太平洋戦争で日本が敗れた昭和二
十年八月十五日以後に教師養成学校に入学した(昭和二十一年六
月入学)人達(平均年令二四歳)から、昭和二十六年三月の卒業
生(これらの中には、教師養成学校以外の卒業生も多く含まれて
いるが)までを一つの枠に入れ、次いで昭和十七年四月、即ち太

〔第 二 表〕

性別	数 年	人 数	在 学 校 別					職 別													職 別				
			幼 稚 園	小 学 校	中 学 校	高 学 校	大 阪 市	衛 星 都 市	郡 部	無 答	0	2	4	6	11	16	21	26	31	41	無 記 入	助 教 員	教 諭	校 長	無 記 入
男	20—24	12	0	11	1	0	4	5	3	0	5	4	3	—	—	—	—	—	—	—	4	8	—	—	
	25—28	28	0	23	5	0	11	7	10	0	—	3	9	16	—	—	—	—	—	—	1	26	—	1	
	29—35	16	0	9	4	3	4	6	4	2	—	1	2	6	7	—	—	—	—	—	1	15	—	—	
	36—40	13	0	7	3	3	1	9	3	0	—	—	—	—	2	10	—	—	—	1	1	11	1	—	
	41—50	28	0	4	14	10	7	12	8	1	—	—	—	—	1	8	14	5	—	—	—	23	5	—	
	51—60	5	0	2	1	2	2	0	3	0	—	—	—	—	—	—	1	2	2	—	—	4	1	—	
	61以上	1	0	0	0	1	1	0	0	0	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	
	(小計)	103	0	56	28	19	30	39	31	3	5	8	14	22	10	18	15	7	2	1	1	7	88	7	1
女	20—24	37	3	34	0	0	10	6	20	1	9	21	5	1	—	—	—	—	—	—	1	22	12	—	3
	25—28	34	3	28	3	0	16	11	6	1	—	4	11	19	—	—	—	—	—	—	5	26	—	3	
	29—35	15	0	14	1	0	6	2	6	1	—	2	3	9	1	—	—	—	—	—	3	12	—	—	
	36—40	7	0	6	1	0	3	1	3	0	—	1	—	—	2	3	1	—	—	—	1	6	—	—	
	41—50	3	0	3	0	0	0	2	0	1	—	1	—	—	2	—	—	—	—	—	—	3	—	—	
	51—60	1	0	1	0	0	0	0	1	0	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	
	61以上	0	0	0	0	0	0	0	0	0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	—	—	
	(小計)	97	6	86	5	0	35	22	36	4	9	29	19	29	3	5	1	—	1	—	1	31	60	—	6
合 計		200	6	142	33	19	65	61	67	7	14	37	33	51	13	23	16	7	3	1	2	38	148	7	7

平洋戦争が始まつて最初の入学者（平均年令二八歳）から、昭和

七名、三二年乃至三五年は三名、四一年乃至五〇年が男子に一名

二十年四月の入学者（平均年令二五歳）まで、換言すれば太平洋戦争中に教師養成学校で学んだ人達をおき、続いて二九歳から三五歳、三六歳から四〇歳、四一歳から五〇歳、五一歳から六〇歳最後に六一歳以上の五つの枠を大体五歳間隔で設け、年令郡別にあらわした結果の相違をみようと思つた。

人数は前にも述べた如く男子一〇三名、女子九七名である。在職学校別では、小学校教師一四二名、中学校三三名で、義務教育担当教師は一七五名であり、他は幼稚園と高等学校の教師であつた。

学校所在地別では、大阪市が六五名、衛星都市（註一）が六一名、郡部（註二）は六七名であつた。なお所要事項の記入なき者は男子三名、女子四名の計七名であつた。

〔註〕一 衛星都市（豊中、貝塚、泉佐野、布施、茨木、守口、吹田、富田林、八尾、池田、堺、寝屋川の各市）

二 郡部（泉南、泉北、南河内、中河内、北河内、三島、豊能の各郡）

経験年数は、大体において数え年の増加率に比例している。一年未満は一四名、二年乃至三年は三七名、四年乃至五年は三三名、六年乃至一〇年は五一名、一一年乃至一五年は一三名、一六年乃至二十年は二三名、二一年乃至二五年は一六名、二六年乃至三〇年は

〔第 三 表〕

		宗 教 的					神 祕 的					科 学 的					審 美 的					経 済 的				
男	順 位	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計
	人 数	12	14	17	11	54	2	5	12	9	28	75	19	7	—	101	3	26	22	16	67	—	4	6	8	18
	%	12	14	17	11	15	2	5	12	9	8	73	18	7	—	28	3	25	21	16	19	—	4	6	8	5
	点 数	43	42	34	11	125	8	15	24	9	55	300	57	14	—	371	12	78	44	16	150	—	12	12	8	32
	平 均	1.3					0.5					3.8					1.5					0.3				
女	順 位	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計
	人 数	4	9	13	19	45	—	3	6	11	20	78	14	2	2	96	6	35	28	12	81	—	—	2	11	13
	%	4	9	13	20	12	—	3	6	11	5	80	14	2	2	26	6	36	29	12	23	—	—	2	11	4
	点 数	16	27	26	29	88	—	9	12	11	32	312	42	4	2	360	24	105	56	12	197	—	—	4	11	15
	平 均	0.9					0.3					3.7					2.0					0.1				
男女の平均		1.1					0.4					3.7					1.7					0.2				
		政 治 的					人 道 主 義 的					軍 国 主 義 的					煽 情 的					社 会 的				
男	順 位	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計
	人 数	—	—	—	—	—	11	28	20	11	70	—	1	—	1	2	—	1	—	1	2	—	1	4	13	18
	%	—	—	—	—	—	11	27	19	11	19	—	1	—	1	1	—	1	—	1	1	—	1	4	13	5
	点 数	—	—	—	—	—	44	84	40	11	179	—	3	—	1	4	—	3	—	1	4	—	3	8	13	24
	平 均	0					1.7					0					0					0.2				
女	順 位	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計	一	二	三	四	計
	人 数	1	1	7	2	11	7	32	27	12	78	—	—	1	2	3	—	—	—	—	—	1	2	5	9	17
	%	1	1	7	2	3	7	33	28	12	21	—	—	1	2	1	—	—	—	—	—	1	2	5	9	5
	点 数	4	3	14	2	23	28	96	54	12	190	—	—	2	2	4	—	—	—	—	—	4	6	10	9	29
	平 均	0.2					2.0					0					0					0.3				
男女の平均		0.1					1.8					0					0					0.3				

あり、無記入は男女夫々一名ずつであつた。

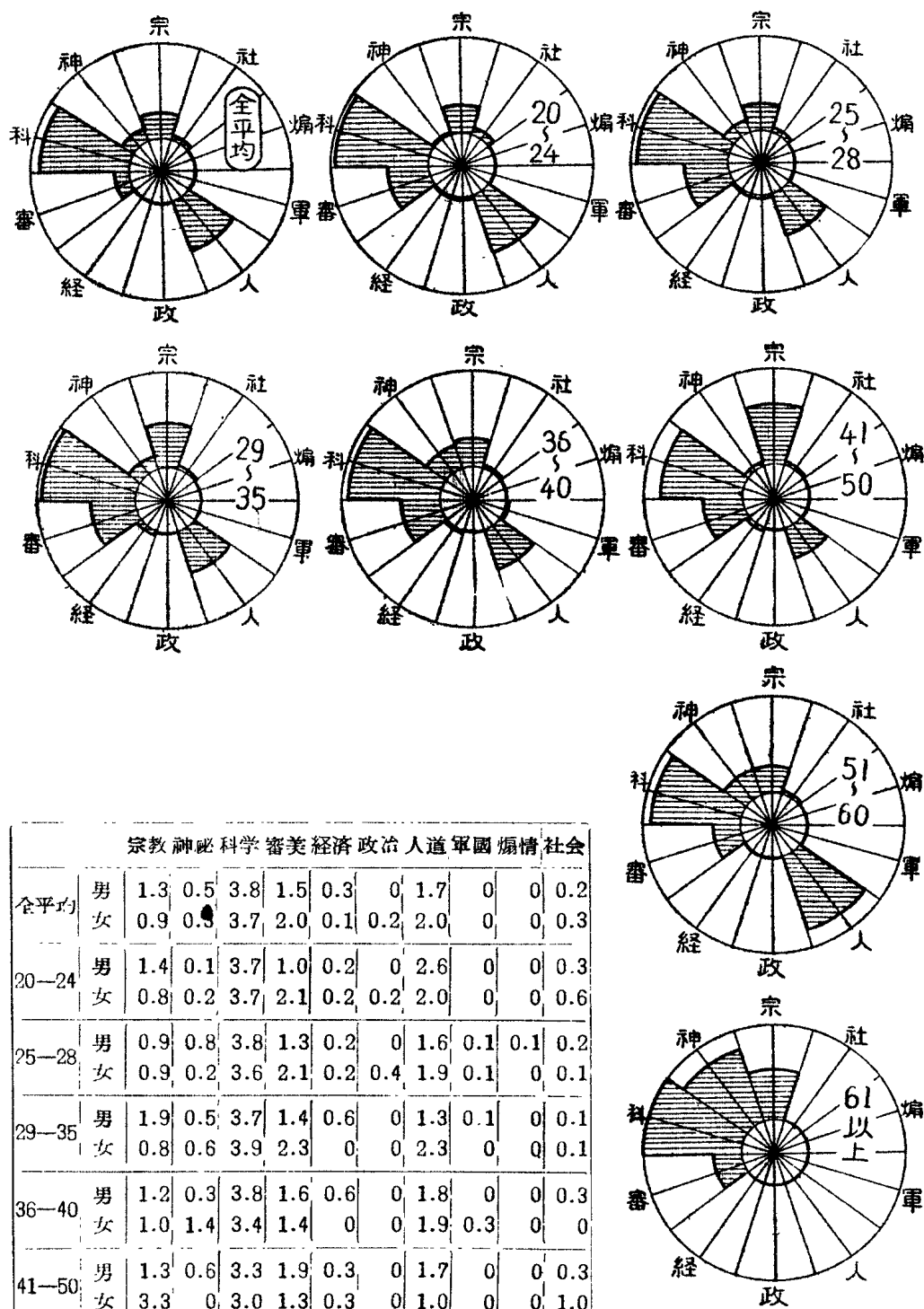
職別では、助教諭が男子七名、女子三名の計三八名、教諭は男子八八名、女子六〇名で計一四八名、校長は男子のみの七名、記入しなかつた者は男子一名、女子六名の計七名であつた。

三 結果の概観

〔一〕の問題の結果、教師は科学的人間の育成に最大の関心をほらい、人道主義的及び審美的人間形成に対する価値評価は割合に高く、政治的・経済的人間形成に関する評価は極めて低く、軍国主義的並びに煽情的人間は、教育されるべきのぞましき人間像から、除外されているという結果を得た。これを、さらに詳細な数字をもつて示せば、第三表の如くなる。

被調査者二〇〇名の四分の三にあたる一五三名が、科学的の項目に(1)なる順位をつけて、何よりも第一に科学する人間の育成を理想にしていることが注目せられる。又この表において点数及び平均の項にあらわれている数字は、各十個の価

[第 四 表]



値範疇とも、(1)なる順位に対しては四点、(2)なる順位には三点、(3)なる順位は二点(4)なる順位は一点、順位なきものは零点として計算し、その算術平均を求めたものである。

右に述べた点数挿入法により各年令層別の価値観像を画いたのが第四表である。

二の問題は自由回答法によつたため、答の形式、内容が多様、多方面にわたつていたが、一の問題との関連という見地から整理して、「意見のワク」を人道主義的なもの、政治的なもの、軍国主義的なもの、経済的なもの、これら以外のもの、および「なし」又は無記入の六つに分類した。

日本の現実の社会問題のうち、人道主義に関する問題への不満と心配がもつとも多く、全体の六一名(男三一名、女三〇名)、三一パーセントを占めている。主要な意見を列挙してみると

物慾、名譽慾、権力慾でかたまつたエゴイストが

あまりにも多い。

三〇%

公共性がすっかり欠如し、道徳が完全に腐敗している。

六八%

その他。

二%

次いで政治問題の五四名(男三一名、女二三名)が多く、全体の二七パーセントにのぼつてゐる。意見は極めて広範囲に及び、その主要なものは

政治が貧困なために要領のいいものが得をし、正直者が馬鹿をみている。

四七%

代議士の態度に多くの不満を感じる。

九%

日本がだんだんアメリカの植民地政策によつて、動かされていくこと。

八%

教育に対する熱意と誠意が、今の政府にはみられない。

八%

自由党の横暴と資本家の独善。

七%

すべての子供に義務教育を完全にうけさせること。

五%

人口過剰に伴う失業問題と社会恐怖。

四%

第三国人が日本国内でのさばること。

四%

言論、思想の自由が圧迫されてきた。

三%

復古的な思想をもつて行動するものが次第に増加してきたこと。

三%

その他。

二%

第三は軍国主義に關した問題で、全体の一一パーセント、二一名(男九名、女二名)が関心をよせている。心配している主な事柄は

又あの恐ろしい戦争がおこりはしないだろうか。

九五%

再軍備にからむ我々青年の兵役問題。

五%

第四は経済面の問題に關するもので、全体の六パーセント、二名(男九名、女三名)が関心を示し、主要な理由として

物価が安定せず、生活費の大半は食費にかかり、税金が高いこと。

九二%

世の中の大抵のことは、金で解決出来るという事実等を並べている。

五%

以上右にまとめた四つのワクにあてはまらない意見を一括して

「その他」とした。この中に含まれるものは三三名（男一八名、女一五名）で、全体の二七パーセントである。代表的な見解をひろいあげてみると

二二%

日本国民が自主性を喪失してしまっていること。
民主主義の真の意味を理解せず、自由の精神をは
きちがえている。

二〇%

理論と実際との間のギャップについて。

一八%

現代の青年は日本を背負つていけるだろうか。

一二%

人間心理の把握のむづかしさ。

六%

アメリカ思想の影響により、老人と青年が心まで

別居する傾向のある点。

六%

一般社会の人が教育に対して無理解である。

六%

意味が十分によみとれないもの。

一〇%

があり、さらに該当事項「なし」と答えたものは男女各々二名ずつで、無記入は全体で一五名（男三名、女二名）、約八パーセントをかぞえた。

ここに列挙した日本教師の数多くの不平不満を概観して、戦後日本の社会における健全な精神復興が、その緩慢なる物的面の復興よりもなお著しくおけていることに気づくのである。

この調査を通じてわたくしが試みようとした、教師の「明日の教育理想像」をうきぼりにするための問題一、および教師の「今日の現実社会観」をつきつめようとした問題二の結果を眺めたとき、両者の間に莫然とした。しかも雑然とした関係をわずかにみ

とめうる程度であつて、その間に明白な連関性を発見することは出来なかつたようである。

わたくしの調査の方法と内容、とくに調査問題の問題性の追及はしばらくおくとして、一見つかみよりのないこの結果、理想観と現実観との複雑なズレが現代日本の社会に生きつつある教師の生態の一面であり、そこにいつわらざる教師の真の姿をみることに出来るのである。

教師が教育目的をどこに設定し、それを子供を通していかに具現せんとしているかは、教師のおかれている社会的背景によつて決定せられる。明日の国家を、やがて生まれてくる民族の新しいにない手や階級の進路をいかに方向づけるべきかを意識している人々の社会においては、教師の教育目的も明瞭に打ち立てられるのである。またわたくしは、教育の目的はその社会の歴史的條件によつても規定せられることに考え及ぶのである。新しい民主社会の教育目的が、古き封建社会の教育目的と異つたものであることは当然のことである。

社会的背景に支えられ、歴史的條件に規定されてこそ、高遠な教育理想も現実の中に生きてくるのである。わたくしは、この調査が転換期のわが国社会の一断層を、反映しえたかどうかをおそれている。

（大阪学芸大学）